2014.9.1
Vol.32
[発行元]
港区芝地区総合支所協働推進課
発行部数30,000部

芝地区地域情報誌

『芝地区地域情報誌』は、地域の皆さんとともに創る情報誌です。芝地区の「いい話」を紹介したり、さまざまな行事や活動の情報を交換したり、地域の皆さんと一緒に地域のことを考えていく場として、地域情報誌を発行しています。

東京モノレールが開業50周年を迎えました

新型車両10000形

魅力あふれる東京モノレール

観光立国の実現、また2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催に向け、日本国内、とりわけ東京では、さまざまな取り組みが始まっています。そのような中、日本と世界を結ぶ空港と都心との懸け橋でもある東京モノレールが、今年9月に開業50周年を迎えます。

そこで今回は、東京モノレール浜松町駅長の山野道彦さんにお話をうかがいました。

「羽田空港は、海外との人・モノの出入口であり、東京モノレールはその結節点という認識でいます。そのため、ただ単に空港へ行くための乗り物ではなく、出国されるお客様を送り出す際、また入国されるお客様への日本のファーストインプレッションとして、従業員一人一人がサポートしたいという気持ち、日本人のホスピタリティを感じてもらえる接客を心がけています」と、空港とのアクセスだけではない東京モノレールならではの役割について、インタビューの中で力説されていました。

また、東京モノレールの魅力の一つとして、沿線の特徴も挙げてくれました。「モノレールに乗車していただくとわかると思いますが、車窓の景色は風光明媚であり、沿線のロケーションは十分に楽しめると思います。また景色だけでなく、沿線には東京港野鳥公園や大井ふ頭中央海浜公園などたくさんの自然豊かな公園があり、都心でありながら里山体験ができる希有な場所です。東京の方々にもこのすばらしいロケーションについてもっと知っていただけるよう、積極的にアピールしていきたいと考えています」と、熱く沿線の魅力を語ってくれました。

浜松町駅長 山野道彦さん

安全神話を未来へつなぐ

昭和39年(1964)に開業した東京モノレール。「当初計画では、起点は新橋駅の予定でしたが、用地買収などの関係で現在の浜松町駅からの開業となりました。開業して50年、浜松町駅の現在の1日の乗降客数は平日10万～12万人、土・日、祝日は3万～5万人に利用いただいています。運行時の最高速度は時速80㎞になり、モノレールでのこの速度の営業運転は世界でも類をみないと思います。浜松町駅舎についてはほとんどが開業当初と変わらず、特にレールのポイントは50年前から稼働し、今日では1日500回以上切り替えが行われます。7月5日に最新式のポイントへ交換し、より安全にご利用いただけるようになりました。今では笑い話ですが、開業当初の運転士は中空を走るモノレールが、ポイントで落ちるのではないかと心配していた、という話を伝え聞いています」と山野さん。

7月には、沿線の景観をイメージしたカラーリングと、和のデザインを随所に取り入れた新型車両10000形を導入し、利用客へのおもてなしや利便性をより一層高いものに。

また、もともと災害には強く、東日本大震災時も翌日には通常運行を開始できたモノレールですが、さらに停電時でも最寄り駅へ乗客を安全に移動させることが可能な蓄電設備を、新たに変電所に導入したそうです。

東京モノレールとともに芝の魅力も世界にアピール

「私が浜松町駅に着任して6年がたちました。沿線の魅力を発信するため、観光インフォメーションセンターが設置されたことが特に印象深いですね。都心で、駅構内に観光インフォメーションセンターを設置しているところはあまりないのでは。前回(昭和39年)の東京オリンピック後に利用者が減った時に、地元である芝地区の皆さんをはじめ、沿線の方々にぜひ利用していただきたいとお願いしたと聞いており、地元の方に支えられてきたとの思いがあります。芝地区には日本文化発信基地として、もっと元気になってほしいと思っています。芝地区が元気になると、モノレールも観光路線としてより一層世界にアピールすることができます」と、最後まで沿線に対する熱い思いが感じられるインタビューとなりました。

日本と世界を結ぶ玄関ともいえる改札口

東京モノレールのホームページには沿線ガイド(Mono-map)が掲載されていますので、皆さんも空港へのアクセスとして利用するだけでなく、モノレールに乗って沿線の景色を楽しんだり、沿線の魅力的なスポットを訪れてみてはいかがでしょうか。 [文■日沖剛]

●東京モノレールホームページ
http://www.tokyo-monorail.co.jp/

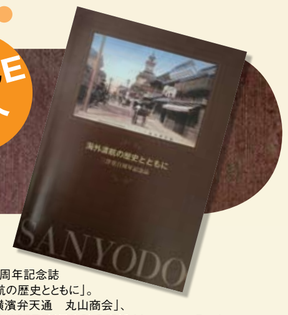
開業当時の駅舎風景。右は開通式

6ページでは掲載記事の所在地を地図上でご案内しています！

新橋から旅を見送った、海外渡航の支え人

VOICE 芝人

朝の連続ドラマ「花子とアン」の主人公、花子が全寮制女学校から5年ぶりに故郷へ帰る際に持っていた、ラインテックス（三本線入り）布地の鞄を覚えていますか。あれは「三洋堂」の鞄です。港区新橋にある海外旅行用品の老舗「三洋堂」。生まれも育ちも新橋という、3代目社長の丸山剛さんを訪ねました。



三洋堂百周年記念誌
「海外渡航の歴史とともに」。
表紙は「横濱弁天通　丸山商会」、
明治40年（1907）創業当時の店舗 Maruyama Brothers

明治時代創業の三洋堂

「三洋堂」は明治40年（1907）、横浜の弁天通で鞄・袋物、靴を扱う「丸山兄弟商会」として開業したのが始まりです。

明治43年（1910）に発行された、ビジネス成功者の人名録「横濱成功名誉鑑」に、創業者の丸山権一郎が靴鞄製造販売として掲載されています。当時、横浜港は海外との往来でにぎわい、渡航に必要な鞄や服の需要が大変高まりました。創業者の弟、丸山敏雄は洋服屋を営んでおり、兄の鞄・靴などとともに「海外渡航仕度」に欠かせない品として重宝され、ビジネスを成功させます。

大正10年（1921）、太平洋、大西洋、インド洋の3つの海を結ぶという意味を込めて「三洋堂」に社名を改めます。昭和14年（1939）、港区新橋に移転。戦後、この界隈はGHQ（連合国軍総司令部）をはじめ、外務省など主要な政府機関が集まっていました。その頃の渡航者は、限られた要人。お国を背負って出かけていく者に恥ずかしい格好はさせられないと、鞄からシャツ、靴下、小物類まで質の良い物をそろえる慣習がありました。その需要に対応してきた三洋堂。立地のメリットを活かし、海外渡航の支度業務を一手に担いました。営業マンは、海外出張者が記載される官報を毎朝チェックし、出張者の屋敷を訪ねて注文を取りました。第一次大戦後のワシントン軍縮会議に向かう全権団の身支度も、一切を整えました。マッカーサーの秘書から、名前入りのパスポートケースの注文があったこともあるそうです。

川端康成もノーベル賞授賞式に出発する際に注文した、
三洋堂オリジナルスーツケース「SUNTEX CEO」

昭和39年（1964）、海外観光渡航が自由化されます。その頃は一人が海外に持ち出せる金額は500米ドル（約18万円）。さまざまな渡航情報や経験をもとに、現金を安心して持ち運びできる腹巻きのようなものや、洗濯1回分に小分けにした洗剤を入れる小物、日本に比べ湿気の少ない国でも「ギュウギュウ鳴らない靴」など、海外でのあらゆるシーンに対応するため、工夫を凝らし、情熱を注いだ製品開発について、丸山さんは熱く語ってくださいました。

テレビ番組「開運なんでも鑑定団」で、東京オリンピックの際に三洋堂が手がけた、アテネから東京へ搬送される聖火輸送用の特殊ポータブルケースが紹介されました。「花子とアン」の花子が持っていた鞄もこれと同じようなラインテックスのデザインです。昭和34年（1959）に上映された日活映画「世界を賭ける愛」（原作 武者小路実篤「愛と死」）にも、三洋堂のラインテックスの鞄が登場しています。懐かしむような笑みで、丸山さんは映画のワンシーンを見せてくださいました。創業100周年を記念して作られたシリアル番号入りの鞄も、ラインテックスのデザインです。

昭和39年（1964）
東京オリンピック聖火輸送用ケース

日本人の旅の文化を支える

会社のキャッチフレーズに「すべてが一ヵ所でそろう」を掲げ、フルブライト奨学生（アメリカとの交換留学、奨学金制度）をはじめ、さまざまな人々の海外渡航のお手伝いをしてきた三洋堂は、昭和30年代半ばからは海外土産販売を開始し成功を収めます。海外から帰ってきた人が、餞別返しのお土産を探していた折に、アメ横で高級万年筆や香水などをそろえ、日本の品だと分からないように、無地の包装をしてあげたのがサービスのきっかけだったそうです。日本人には元来「お礼を交換する」＝旅に行く者には餞別を渡し、旅から戻った者はお土産を渡すという行為が文化としてあるようです。川端康成のノーベル文学賞授賞式の渡航準備をした際も、お土産として、川端が訪問した国が記された風呂敷の注文に対応したそうです。

現在、インターネット上でも「世界のお土産ショップ」を展開しており、海外に出かけた際、お土産を探す手間を一挙に解消してくれ、国内旅行でも観光をしている間に、代わりに現地のお土産をそろえておいてくれます。

新たな海外交流の支えとなって

2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、海外との交流がさらに活発になろうとしている新橋。「海外からの観光客向けの日本のお土産など、さらなるビジネスの展開を考えながら、生まれ育った思い入れある新橋の街を、さらに発展させていきたいですね」と、熱く語ってくださいました。

老舗の力強さ、そしてビジネスが続くことで紡ぎ出される物語を感じることができました。

［文■早川由紀　取材■森明、早川由紀］

●参考文献　「海外渡航の歴史とともに」 三洋堂百周年記念誌
「横濱成功名誉鑑」
●取材協力　株式会社　三洋堂　代表取締役社長　丸山 剛

Information

株式会社　三洋堂
新橋1-18-14（本社）
TEL 03-3508-3410（代表）

芝地区いきいきプラザ 元気づくり事業編（介護予防事業）

冬のスキーと夏の山行を、私は一生涯続けたいと思い、退職後、「いきいきプラザ」で実施されている健康トレーニング教室に毎週通っています。今回は私の体験をもとに、その教室のいくつかをご紹介します。

「もっと健康トレーニング」

少し強めの運動を希望する人向け（60歳～）

新虎通りを虎ノ門ヒルズに向かい、隣の茶色いビルが虎ノ門いきいきプラザ（とらトピア）です。まず体重・体脂肪・血圧・脈拍などを計り、運動前の体調を把握します。15人ほどが集まると、テキパキとした講師の指導で、念入りなストレッチ、続いて写真のような有酸素運動、ボールを使った下半身の筋トレなど、計算された日替わりのメニューが続きます。最後にストレッチをした後、再度、血圧などを測定して90分のトレーニングが終了します。休憩時には楽しい雑談で笑顔。時には健康講座も行われます。

もっと健康トレーニング（虎ノ門）の様子

「頭とからだの健康教室」

ドリルと体操による認知症予防（65歳～）

JRの線路沿いを浜松町駅方面へ進むと、色のついた窓に遊び心のある白い建物の神明いきいきプラザ（プラザ神明）に到着。認知症予防のためのドリルや肩こり、腰痛予防体操を、椅子に座ったままの楽な姿勢で30分程度行います。私はその後、とらトピアに移動し「ヨガ」を45分間受け、ゆったりリラックスしています。

頭とからだの健康教室（神明）とヨガ（虎ノ門）の様子

「セルフマシントレーニング」

自分でマシンを使ってトレーニング（65歳～）

マシンを使うためか、10人ほどのうち半数が男性です。準備のストレッチ後、リズム体操、練功十八法などで30分ほど筋肉に十分な刺激を与えます。そして指導員の指導のもと、各人に適したメニューでマシントレーニングを40分。最後にストレッチポールなどを使ってクールダウン。もちろん、運動前後の体の変化を測定します。

セルフマシントレーニング（神明）の様子

このカリキュラムで、1週間のトレーニング量は合計約4時間30分です。これを日課として続けたところ、体脂肪率が減る一方、筋肉量、基礎代謝量が増え、4年間で持久力、瞬発性、柔軟性などが向上。おかげさまで健康な毎日を送ることができています。

芝地区のいきいきプラザ3館には、「元気づくり事業」など、トレーニング事業が多く用意されています。各々の体の状態に合わせたプログラムがあるので、まずは、施設に問い合わせるか、見学をしてみてください。きっとお元気な毎日を過ごせますよ。　［文・写真■米原剛］

＊曜日・時間などの詳細は各施設へお問い合わせください。

Information

三田いきいきプラザ
芝4-1-17　TEL 03-3452-9421
神明いきいきプラザ（プラザ神明）
浜松町1-6-7　TEL 03-3436-2500
虎ノ門いきいきプラザ（とらトピア）
虎ノ門1-21-10　TEL 03-3539-2941
●ホームページ　http:// www.toratopia.com/

三田

神明

虎ノ門

消えた芝橋 ～ここにも小さな歴史～

明治5年（1872）に作成された「東京府志料」では、入間川（いりあいがわ）について「水源は第二大区八小区三田四国町、鹿児島邸跡の下水から流れ出し、南は本芝材木町・本芝一丁目と、北は西応寺町・芝金杉四丁目・芝金杉浜町との間を経て海に入る」と説明しています。この川に架かっていた橋の一つに「芝橋」がありました。

数多くの人々が芝橋を渡る

往時の芝橋の長さは4間（約7.2メートル）、幅2間3尺半（約4.5メートル）。それほど大きな橋ではありません。「お江戸日本橋七つ立ち、初上り、行列揃えて、アレハイサノサ、こちや高輪…」と東海道「上り唄」があります。参勤交代で国元に帰る西国大名や、商売、旅行で東海道を行き交う多くの人々が、この橋を渡ったことでしょう。

かつて芝橋のあった辺り（現芝四丁目交差点付近）

当時の芝橋の様子（左図右下付近）

眺望が開けた場所

かつての芝橋から東を眺めると、江戸湾がすぐ近くに見えていました。青い空、青い海、白帆の船が行きかい、遠くに房総半島。まさに、一幅の絵を見るような絶景地だったのでしょう。

明治28年（1895）8月15日の東京朝日新聞に「東京本芝浦鉱泉浴場並旅館開業。8月12日ヨリ。浴場ハ海岸ニ建築致シ極テ涼ク市中ヨリ寒暖計十度以上低ク見晴シノ絶景ナル（以下略）」と、芝濱館の開業広告が載っています。人々は海水浴を楽しんだり、料理に舌鼓を打ったり、絶景に見とれたことでしょう。明治30年（1897）に発行された「新撰東京名所図会」には、入間川の河口で営業する「芝濱館」「見晴亭」「大光館」など、当時繁盛していた料理屋が描かれています。

芝橋が消えた

旧東海道も明治22年（1889）以降、道路の改修が順次行われ、入間川は埋め立てられ、芝橋も撤去されました。

昭和50年代、私は土地の古老からこんな話を聞きました。「芝橋があった頃、この辺りに階段があってね。入間川から運搬されてきた材木を荷揚げしていた。懐かしいね」。それを示すのが旧町名である「本芝材木町」です。この辺りには材木商の方々が住んでいて、製材する音がよく聞こえたそうです。

今は、入間川も芝橋もありません。でも、この地で人々は活気とにぎわいの中で生活していました。当時とは地域の様子がだいぶ変わりましたが、ここにも小さな歴史が垣間見られます。

［文■清田和美］

●参考文献
「芝区誌」東京市芝区役所、「東京府志料」東京府、「近代沿革図集」・「港区の文化財」港区教育委員会、「東京案内」東京市役所

区役所のサービスや施設・催しの案内はみなとコールがお答えします！　TEL03-5472-3710　年中無休 午前7時～午後11時

堀商店

錠前、建具金物の老舗メーカー

和錠と鍵

新橋駅から虎ノ門方面に歩いていくと、道行く人の目を惹きつけるレトロな雰囲気の建物に出会う。スクラッチタイル張りで、建物全体が少し丸みを帯びており、屋上にはグリム童話に登場するラプンツェルの歌声が聞こえてきそうな塔屋を頂いている。

堀商店本社ビルは、関東大震災による社屋焼失後、昭和7年(1932)に再建された。建築関係の雑誌、書籍や各種情報紙にもしばしば取り上げられており、ブログなどのウェブサイト上に掲載されることも多い。平成9年(1997)に「東京都選定歴史的建造物」に指定され、翌年には国の「登録文化財」に指定されている、昭和を代表する貴重な建築物である。

合資会社堀商店は明治23 年(1890)創業、現社長の堀英一郎さんで4代目となる、錠前・建具金物の老舗メーカーだ。

「日本人は扉に取り付けられているのもカギ、それを開けるのもカギ、同じ『カギ』という単語で表現するけれど、正しくは『錠』と『鍵』なんですよ。英語は'Lock'と'Key'とで、ちゃんと区別されていますけどね」と語る堀英一郎さんと、前会長の妻であり、「港区重症心身障害児(者)を守る会」などの地域活動も続けられている同社会長の堀信子さんに、前会長の思い出とともに堀商店のあゆみについてお話をうかがった。

現社長 堀英一郎さん(左)と現会長 堀信子さん(右)

長州(現在の山口県)出身の初代社長堀良助は、明治維新のころ京橋区木挽町(現在の中央区銀座)の洋家具屋に弟子入りした。その後、現在の地で堀商店を開業し、欧風建具金物、暖炉金物、タイルなどを扱う貿易業を営んでいたが、そのころから錠前・建具金物の製造も始めていた。

現在、同社が製造、販売している商品の多くは、堀英夫前会長が開発したものだ。大変研究熱心で、錠前と鍵に対して並々ならぬ思い入れがあり、論文や著書も執筆している。

昭和30～40年代に各地で建設された「公団住宅」には、英夫前会長が開発した低価格で質の良い錠前が採用されている。また、アメリカ人も驚くほど英語に堪能で、その英語力を生かしアメリカ製シリンダー錠の研究を重ね、同社の代表的な商品である「トライデントシリンダー」を開発した。

「ミラ集合住宅(CASA MILA1906～1910)の間仕切り扉のハンドル」

2階展示室。見学には電話予約が必要

トライデント®シリンダー。ウサギのようにも見えるシリンダーはドアに隠れてしまうが、細部までこだわる、製作者・堀英夫前会長の「遊び心」だろうか

東京オリンピック開催に合わせ、ホテルの客室に取り付ける錠前の開発のために、昭和34年(1959)に初めてアメリカへ視察に訪れて以降、世界各国を旅行した英夫前会長が収集した、アジア、中東、ヨーロッパ、アフリカの珍しい鍵や錠前、からくり箱などのコレクションが、2階の「鍵の展示室」に陳列されている。

1階ショールームには、重厚感のある錠前やドアノブ、レバーハンドル、ヨーロッパ風デザインの建具金物―「フェロネリ」シリーズなどが数多く展示されている。その中でもひときわ目を惹くのが、スペインを代表する建築家アントニ・ガウディ(1852～1926)の作品のレプリカである。同社が創業100年を迎えたとき、記念事業として開催した展覧会のために、スペイン・バルセロナにある世界遺産「アントニ・ガウディの作品群」のうち、「カサ・ミラ」や「グエル邸」の把手(とって)の実物を測量、撮影して忠実に再現したものだ。職人の手仕事の技術の高さとともに、代々受け継がれる「こだわり」を感じる一品である。

古き良き伝統を守りながら、錠前の安全性、堅牢性を追求し続けている。

[文■菊池弓可　取材■森明、菊池弓可]

●取材協力　合資会社堀商店

Information

合資会社　堀商店
新橋2-5-2　TEL 03-3591-6301

地元に愛され続ける老舗八百屋、柳下(やぎした)商店

昭和6年(1931)、芝田村町(現在の虎ノ門ヒルズの前)に先々代の柳下(やぎした)瀞が店を構え、戦後に愛宕下通りに移り、平成4年(1992)から現在の西新橋2丁目のビルで野菜を販売し続ける柳下商店。結婚53年目の柳下信一さん、初恵さん夫婦が営んできた八百屋の店先には、お孫さん2人の元気な声が聞こえる。お孫さんが描いた似顔絵が並ぶ店舗上階のリビングで、インタビューに応じてくれた。

開業当初、毎朝5時に築地で仕入れをし、夜は12時までの営業。トラック1台分の野菜が売れていたのが当たり前の時代。午後11時に閉まってしまう銭湯へ行けないほどの忙しい日々。配給制の野菜は、入荷すればすぐに全て売れてしまうほど。バブルの頃には、何人アルバイトを雇っても人手が足りず忙しかったが、アルバイトが開店時間になっても来なかったところ、飲み明かして寝坊だった、というエピソードも許されるくらい景気が良い日々だったとのこと。しかし、どんなに遅くなっても家族の「おやすみ」の声でホッとできる。夫婦が一緒に過ごせる仕事と、なじみのある場所だったからこそ続けてこられたという。

素朴なたたずまいの店先

虎ノ門～新橋辺りに当時60軒ほどあった八百屋も今は5軒。柳下商店でも行列ができていた時代とは違い、今は店主となった息子さんが、浅草、両国、秋葉原、渋谷まで野菜を届けるようになった。また、区が高齢者買い物支援事業(芝地区)として、いきいきプラザで注文販売を実施しているが、そのお手伝いで施設に野菜を届けている。その際、使い勝手のよい量に野菜を小袋に分けるひと手間が、買い物に来る高齢者に好評とのこと。現在、午前8時から午後8時まで営業しているお店は、昔アルバイトで働いていた人たちが立ち寄ってくれたり、地元の知り合いなどが集う場となっている。

店内にて。柳下信一さん(右)と、初恵さん(左)

「東京タワーを見ると落ち着くんですよ」。東京のシンボルをそう語るご夫婦。柳下商店は、地元の人にとって落ち着く場所でありながら、ご家族自身がほっとできるひと時を積み重ねてきた、温かさと輝きに満ちた場所だった。

[文・写真■高井志保]

Information

柳下商店
西新橋2-19-2　TEL 03-3437-5527

芝のNewコミュニティ

夢がかなう不思議なカフェ・リトルトーキョー

そびえ立つ虎ノ門ヒルズのすぐ脇に、気になるお店がある。お寿司屋さんの看板が残っているが、「リトルトーキョー」というカフェのようだ。コンセプトは「はじめるひとの、つくるまち」。仕事と出会い仕事を生む場所らしいが、リラックスのために訪れるカフェで仕事って、一体どういうことだろう? スタッフの中嶋希実さんにお話をうかがった。

「リトルトーキョーは、カフェであると同時にひとつの『まち』、仮想都市という設定になっています。このまちの市民になると、好きな肩書をもち、やってみたい仕事をここで試してみることができるんです。ドイツ・ミュンヘン市で行われている活動、子どもによる仮想都市『ミニ・ミュンヘン』にヒントを得ました。市民からは税金という名目で、参加費のようなものをいただいています。やりたいことを提案し市議会で可決されると、みんなで集めた税金の中から、実現のための予算も得られるという仕組みです」

運営をしているのは、"生きるように働くひとの仕事探し"「日本仕事百貨」という求人サイトを運営する株式会社シゴトヒトと、"ほしい未来"をつくるためのヒントを発信するウェブマガジンを運営しているNPO法人グリーンズ。内装はスタッフ自らが手がけたそうで、おしゃれでホッとできる空間だ。

「やりたいことなら仕事でも遊びでもいいんです。本屋さんに挑戦した人が、その後店内で『小屋BOOKS』という書店をはじめたり、みんなでゲームをすることが目的の遊び人という肩書の人が、ゲームの開発者になったり。ここでの試みが、実際の仕事につながるケースも多いですし、人との出会いにより新しいアイデアも次々生まれています」と中嶋さん。ほかにも「闇鍋奉行」「紹介人」「お手伝いさん」「大工」など、市民の肩書は多種多様。夜な夜な開催されるイベント「しごとバー」では、日ごとにその道のプロがバーテンダーとなり、テーマを通じて集う人たちの出会いと交流の場になっている。現在市民は70人ほど(平成26年6月現在)。今の仕事を考え直してみたいという、20～30代の市民も多いそうだ。新しいことをはじめるには勇気とリスクへの覚悟が必要だが、仮想のまちで試した経験から、実現への自信やきっかけを手に入れることができる。リトルトーキョーはそんな可能性を秘めた「まち」なのだ。

お話ししてくれた中嶋希実さん(右)と、カフェ・バーのスタッフ増田恵さん(左)

カフェ
「リトルトーキョー」
愛宕1-2-1
ホームページ
http://littletyo.com/

虎ノ門ヒルズ開業の影響で人通りも変わり、リトルトーキョーに感心を持つ人も増えたという。中嶋さんは「人が集まることも多いので、なんの店? と思っている方もいるようです(笑)。誰でも利用していただけるカフェなので、地元の方々はもちろん、もっと多くの人たちにリトルトーキョーの取り組みを知っていただき、この場所からおもしろいことがたくさん起こるよう期待しています！」と笑顔で話してくれた。

ノッポな虎ノ門ヒルズがひとつの街なら、リトルトーキョーもひとつの「まち」。夢とチャンスがあふれるこの場所から、リアル東京で活躍する人がたくさん生まれそうだ！

[文・写真■森田友子]

6月にはマルシェを開催

働き方の総合書店「小屋BOOKS」

ランナーのためのスムージーをつくるお料理好きの3人組「ランジー」

蛇の目鮨の看板が残る外観

区役所のサービスや施設・催しの案内はみなとコールがお答えします！　TEL03-5472-3710　年中無休 午前7時～午後11時

芝の食文化

饅頭 庶民のおやつに根強い人気のヘルシー菓子

創業から看板商品として人気の栗饅頭。餡の中にも崩した栗が練り込んである

日本の美しい四季の風情を表現した意匠を目で楽しみ、香りと味わいに満たされる和菓子は、日本独特の美意識から生まれた芸術品と言っていいでしょう。生誕から冠婚葬祭、年中行事など、人生の節目には引出菓子として出され、また茶の湯にも欠かせない品です。

饅頭とともに人生を過ごされている社長の関根義彦さん

江戸幕府八代将軍徳川吉宗が国産砂糖を奨励して栽培が広まり、それが菓子にも使われ和菓子文化が発展します。日常のおやつとして人気の饅頭が、庶民の間で食べられるようになったのは江戸中期ごろから。江戸市中に菓子専門店ができ、門前や街道筋の茶店、行商人などによって全国に広まり定着しました。

菓子のレシピ本もいくつか出版されましたが、天保12年(1841)に発行された「菓子話船橋」には薯蕷(じょうよ)饅頭、葛饅頭、酒饅頭など8種類の饅頭が紹介されていて、現在の菓子類の基礎になっています。「和菓子」という言葉は、明治になってから使われるようになります。西洋文化がどんどん入ってきた折に「洋菓子」と区別したのです。

西新橋1丁目交差点の歩道橋隣、大きな間口の和菓子店「丸万」は昭和22年(1947)に開業しました。当時は木造平屋の店の奥で、ご夫婦が全て手作りして売っていましたが、関根義彦さんが2代目を引き継いでから、機械化し効率を上げました。広い店内には色彩の美しい和菓子がたくさん並んでいますが、中でも「栗饅頭」と「岩栗」「どら焼き」が名物で人気があります。関根さんが栗饅頭の中に栗を丸ごと1個入れるようにしたところ、たちまち評判になり売れ行きが伸びたそうです。さらに工場を建て、従業員も増やしました。

岩の形を模した岩栗

栗は四国の業者から、5種類の蜜で5段階に仕込んだものを大量に仕入れ、工場でさらにもう一度火入れをします。皮には北海道産の良質の小麦粉を、餡はいんげん豆の一種の手亡(てぼう)という白豆を使用しているそうです。

大きな栗が入った上品な味わいのどら焼き

栗饅頭を作った後に残った端の皮を再利用した岩栗には、一つ一つ手作業で大きな栗を入れているためそれぞれ微妙に形が違いますが、小ぶりながら食べ応え十分で、皮の上には羊羹ものっています。どら焼きにも大きな栗がどかんと入っていて、ふわふわとした口どけの軽い皮と、ほど良い甘さの餡と栗が一体となりとても美味です。

関根さんは1年おきくらいに北海道帯広の生産者のもとへ、栗饅頭をお土産に持って訪問しています。「上質の黒土を耕した広大な畑を見て、これならいい小豆ができると満足しています。年々作付け面積を広げてくれるので嬉しくなります」。美味しい栗饅頭を食べて、生産者たちもやる気が上がるのでしょう。

新橋で生まれ、ずっと和菓子と接して愛着をもってこられた関根さんは、「和菓子の魅力は、ずばり美味しいから。洋菓子とコラボレーションした創作和菓子がたくさん出ていますが、和菓子は和菓子らしく日本の食文化を後世に伝えたいです」と熱い思いを語り、日本伝統の和菓子を守っています。

9月は栗名月とも言われています。秋の味覚を堪能されてみてはいかがでしょう。

［文■千葉みな子　写真■町田明夫］

●参考文献
中山圭子著『和菓子の世界』岩波書店

Information
丸万
西新橋1-11-1
TEL 03-3504-3751

町会・自治会トピックス

新橋環境浄化パトロールが200回目を迎えました

新橋四丁目町会をはじめとした新橋地域の町会・自治会で行われている「新橋環境浄化パトロール」が、6月18日で開催200回目を迎えました。

この活動は、平成6年(1994)から継続して毎月1回程度行われており、ごみ拾いや、不法に道路を占用している看板や自転車などの取り締まりを行っています。地域の皆さんが「新橋を訪れる人が、少しでも安心して新橋のまちを楽しんでもらえるように」と活動に参加しています。

200回目のパトロールにも、町会などの皆さんに加え、近隣企業、御成門小学校PTAや青少年御成門地区委員会など100人近くが参加し、新橋のまちを1時間ほどパトロールしました。

新橋のまちを愛する皆さんの活動を、今後もぜひ応援してください。

新橋四丁目町会岡村会長のコメント

地道に始めたパトロールも皆さんのご支援あって、遂に200回を迎えました。
新橋で商売をする人、訪れる人、住む人が気持ち良く過ごすことができ、今まで以上に多くの方々が気さくに新橋を訪れてくださるようパトロールに取り組んでいます。今後ともご支援、ご協力よろしくお願いします。

第200回パトロールの様子

町会・自治会に関する問合せ先、加入に関する問合せ先
芝地区総合支所協働推進課協働推進係　TEL 03-3578-3126

芝地区MAP

本誌に掲載した記事に出てくる施設などをまとめました。
ウォーキングマップとしてご活用ください。

守り続ける音

～芝神明子供お囃子会～

芝神明子供お囃子会とは

芝神明神社(芝大神宮)の氏子の中で、唯一残っている江戸囃子があります。「芝神明子供お囃子会」※1は、約300年もの歴史のある「葛西囃子」※2を基本とし、民族芸能保存のため祭礼囃子連として活躍していることはもちろん、地域の活動にも積極的に参加し、伝承に励んでいます。

力強い「音」

主な練習場所は区立芝公園の隣にある「芝東照宮」の参集殿。荘厳な建物と心地よい木陰。それらの風景に一層の風情を感じさせる「太鼓」の音が聞こえてきます。空へと突き抜けるような気持ちの良い音です。大太鼓(オオド)が1張と小太鼓(シタベ)が2張、だんだんとそれぞれの呼吸が重なり合って、体の中に一本筋を通したように伝わる潔い一つの「音」へと変化していきます。それはとても力強く、目を閉じると熱気に包まれた夏のお祭りの風景が浮かんできます。

練習風景

「天」や「テ」などのリズムで覚えます

地域の「子ども」が少なくなった

楽しんでお稽古をしています

このお囃子会が発足したのは昭和2年(1927)のこと。「芝神明子供お囃子会」の名のとおり、もともと子どものお稽古ごととして作られた会で、子どもとその保護者が参加するという形で継承されてきました。しかしながら現在の子どもの参加者はわずか5人。お囃子会の担い手である子どもの参加者がなかなか増えません。多い時は27人もの子どもが参加しており、練習用の太鼓が足りずタイヤを代わりに使ったこともあったそうです。

お囃子会を守り続ける

時代の流れとともに子どもが減少。それでも「芝神明子供お囃子会」は存続しています。それは子どもが大きくなり、部活動などの理由でお囃子会を辞めてしまったあとも、その保護者の方々がこのお囃子会を守り続けてきたからです。「芝神明神社の氏子の中で唯一残っているお囃子会」というプライドと、いつかまた「子どもの笑顔があふれるお囃子会にしたい」という思いで、80年という長い歳月の間、お囃子会を守り続けてきたのです。

想いを「音」に

会員の一人の方がこう話してくださいました。「お囃子はもともとお神輿(みこし)の担ぎ手を活気づけ、祭りを盛り上げるという役割がありますが、囃子連として自分が参加することで、祭りへの一体感を感じます。自分たちも祭りをつくっている!という気持ちになります」。一つのものをみんなで守っていくということは簡単なことではありません。しかしそこに生まれる絆や歴史はかけがえのないものだと思います。そうした想いを感じて耳を傾けると、より一層太鼓の「音」が味わい深いものになります。これからも「芝神明子供お囃子会」が人と人との想いをつなぐ、かけがえのないものであることを願っています。

会員の皆さん

［文・写真■齋藤恵里花］

※1「芝神明子供お囃子会」月に1～4回活動。園児～(要保護者付き添い)
※2「葛西囃子」とは、篠笛(シノブエ)1、大太鼓1、小太鼓2、鉦(ショウ)1の5人編成により曲を演奏する。もともとは東京都葛飾区葛西神社に伝承されている祭囃子であるが、江戸川区をはじめとする東京都内で広く伝承され続けている。

芝にある風景

新虎通りと烏森神社例大祭

絵・文 大野正晴

環状2号線(新虎通り)が今年3月29日に開通しました。戦後60年以上の歳月を経てようやく開通しましたが、これからがストーリーのあるストリートとなるよう、魅力あるまちづくりをしていきたいものですね。

烏森神社が位置する新虎通り周辺は、昔は家具屋が軒を並べていた場所です。昭和30年代頃は、地場産業ともいえる家具に関わる塗師屋やガラス屋、椅子貼り屋、そして家具金物のお店などが密集しており、活気に満ちていました。私の伯父も当時は家具屋を営んでおり、父親はその家具屋の職人でした。今ではそのほとんどがなくなってしまい、少し寂しい思いもあります。

6年後の東京オリンピック・パラリンピックでは多くの人が訪れると思いますが、東京のシンボルロードとして新虎通りが発展し、多くの人で活気あふれるよう、共に魅力的なまちを築いていきたいと思います。

今回のスケッチは、5月5日に新橋烏森神社の大神輿が新虎通りを渡御(とぎょ)した様子を描きました。新旧の素晴らしいものが混じりあった不思議な光景でしたが、このまちの未来を見ているように思えました。

●大野正晴
昭和26年(1951)生まれ。新橋で生まれ育ちましたので、特に港区、芝地区には愛着を持っています。この地域は歴史的な名跡が多く、ニュースポットもいろいろとあります。心に感じた風景を今後も描き続けたいと思っております。
36年間、新橋タカトク金物(株)に勤務。

芝次郎のおべんとう2

※三女 芝代(20歳)

eco design＊え・まつもとかずこ

区役所のサービスや施設・催しの案内はみなとコールがお答えします！　TEL03-5472-3710　年中無休 午前7時～午後11時

芝地区の3つの小学校で、防災イベントが開催されました

クイズに芝次郎が登場すると、子どもたちから大歓声!

7月18日(金)、芝地区の赤羽小学校、御成門小学校、芝小学校で、各小学校PTA主催の防災イベントが開催されました。

各小学校のイベントには、昨年度に引き続き、芝地区総合支所協働推進課も参加し、芝地区のキャラクター「芝次郎(しばじろう)」による「防災○×クイズ」や「保護者向け防災講座」などを実施しました。

赤羽小学校の「防災子ども大会」では、芝消防団による放水の見学や、水消火器を使ったゲームなどが行われ、御成門小学校の「親子であそぼう会」では、119番通報訓練、三角巾の使い方教室、防犯教室などのコーナーを親子で体験しました。

三角巾の使い方教室で子どもたちひとりひとりに丁寧に指導する港区赤十字奉仕団の皆さん

また、芝小学校の「被災体験宿泊会」では、芝消防団による放水の見学、ロープ結索訓練、紙食器の作り方教室などのほか、港区赤十字奉仕団の協力のもと「三角巾の使い方教室」が行われ、多くの子どもたちが、三角巾の折り方によってさまざまなケガの処置に使用できることを学びました。

芝地区総合支所協働推進課による「芝次郎の防災○×クイズ」では、各小学校の子どもたちが芝次郎の登場に笑顔を見せるとともに、クイズに真剣に取り組み、正解発表の前に自ら答えを発するなど、防災に関する知識をしっかりと身に付けていることがうかがえました。

防災講座での「まちづくり部会」メンバーによる活動紹介の様子

また、「保護者向け防災講座」では、各家庭における防災対策を中心に職員が説明するとともに、芝地区区民参画組織「芝会議」において防災と環境をテーマに活動している「まちづくり部会」のメンバーが参加し、部会の活動内容や今後予定されるセミナーなどについて紹介してくれました。

芝地区総合支所では今回のイベントをきっかけとして、今後も区と小学校との防災に関する連携強化に取り組み、地域の防災力の向上につなげていきます。

総合防災訓練(芝会場)のお知らせ

日時 **10月5日(日)午前9時30分から11時30分まで**

場所 **都立芝公園4号地**(みなと図書館の隣)**芝公園3-2**

初期消火訓練や炊き出し訓練、応急救護訓練などに加え、親子で取り組める訓練も実施します。

いつ起こるか分からない災害に備えるため、この機会に防災について、地域の方々とともに考えてみませんか?

皆さんの参加をお待ちしています。

問合せ先　芝地区総合支所協働推進課協働推進係　TEL03-3578-3124

芝地区掲示板

お知らせ

芝地区「高齢者買い物支援事業」

出張販売 虎ノ門マーケット 神明マーケット

虎ノ門、神明いきいきプラザで毎週水曜日(正午～午後2時)に、「食料品、飲料水、駄菓子」などを出張販売します。

皆さんのお越しをお待ちしています。

神明マーケットでの「阿見とれたて野菜市」開催時の様子

対象　65歳以上のひとり暮らし高齢者、高齢者のみの世帯

内容　野菜や米などを中心とした商品の注文を受け付け、区内商店に発注。
いきいきプラザで商品を受け渡し。
希望者には自宅まで購入品を一緒に運ぶ同行支援も承ります。

費用　■商品の注文　：**1回50円**
■商品の運搬・同行：**1回50円**
※商品代金と費用は、受け渡し時に実費をお支払いいただきます。

実施場所　・虎ノ門いきいきプラザ(とらトピア)
虎ノ門1-21-10
・神明いきいきプラザ(プラザ神明)
浜松町1-6-7

問合せ先　芝地区総合支所協働推進課まちづくり推進担当
TEL03-3578-3104

お知らせ

芝地区のまちづくり組織

芝地区に登録されているまちづくり組織

環状2号線新橋地区環境・まちづくり協議会

活動範囲　新橋四丁目、西新橋二丁目地区

芝一丁目まちづくり協議会

活動範囲　芝一丁目地区

港区では、地域の皆さんによる自主的なまちづくり活動を支援する仕組みをつくりました。まちづくりについて地域の皆さんが積極的に参加することを応援しています。

芝地区のまちづくり組織の相談は、協働推進課まちづくり推進担当が窓口になっています。

問合せ先　芝地区総合支所協働推進課まちづくり推進担当
TEL 03-3578-3104

●本誌の制作には以下の編集委員が参加しています。
菊池弓可／清田和美／桑原庸嘉子／齋藤恵里花／作田宗子／柴崎郁子／柴崎賢一／高井志保／千葉みな子／早川由紀／日沖剛／町田明夫／森明／森田友子／湯原信一／米原剛
(五十音順 敬称略)
●今後の発行スケジュールは次の通りです。
H26.12.1発行(第33号)、H27.3.1発行(第34号)
H27.6.1発行(第35号)、H27.9.1発行(第36号)

芝地区地域情報誌の配布について

芝地区総合支所【芝、海岸1丁目、東新橋、新橋、西新橋、三田1～3丁目、浜松町、芝大門、芝公園、虎ノ門、愛宕】内の地域の方にお届けしているほか、地区内各施設等で配布しています。

芝地区地域情報誌編集委員を募集しています!

芝地区の話題を発掘、取材し、執筆していただく地域情報誌編集委員(記者)を募集します。

対象　芝地区管内に在住、在勤、在学で取材に携わりたい人

内容　地域の話題の収集、取材、写真撮影、原稿作成など(年4回発行予定)。発行予定ごとに平日の昼夜間に2時間程度の取材と、平日夜間に2回程度編集会議への参加があります。

申込み　氏名、住所(在勤、在学の人は所在地)、連絡先、在住・在勤・在学の区別を明記の上、下記の芝地区総合支所協働推進課まで、ファックスまたは郵送でお申込みください。

その他　報酬、交通費等の支給はありません。

港区芝地区総合支所協働推進課　〒105-8511 港区芝公園1丁目5番25号(港区役所2階)
TEL03-3578-3193　FAX03-3578-3180
ホームページ http://www.city.minato.tokyo.jp/